

アルベルト、aigner、スタイルは一八七九年ドイツ國ウルンブルグ州ウルムの町に呱々の聲を擧げた、兩親はドイツ生れのユダヤ人であるといふとある、十六才の頃までミクンヘンのギムナジウムに通つたがその後チウリッヒで數學と物理學とを学び幾何もなくし嘲笑する。私は以外の人にこうした話を聞くと、そんなとてどうなるかといやだつたと同時に、他人を使ふことをも欲しなかつた。

私は私以外の人にこうした話をすると、そんなとてどうなるかとよく笑はれたものである、今までそんな話をしようものなら人は師となり、そこに一九〇九年まで在職した、彼の初期の思素はここで等變るではない、人がいくら笑つても私はその人を又笑ふまでのと間で創造せられたのである、その後チウリッヒ大學、ブランゲ大学の教授となり越えて一九一四年ベルリンに聘せられてプロシヤ科学院に席を占めベルリン大學の講壇に立ち、兼ねて物理研究所に長息によれば昨年頃からオランダのライデンに行つてゐるやうであるだと思つてゐる。

私は私以外の人にこうした話をすると、そんなとてどうなるかといやだつたと同時に、他人を使ふことをも欲しなかつた。

時感

白峯

例へはノロエステの救済資金請願もそれを悪口する日伯紙も反対する聖報も八方からの中傷で迷つてゐると噂のある大使も扱ては聖州義塾設立に苦心の小林氏もそれにけちつける時報も、すべては者へた或は感じたとをして居り云つて居るに過ぎぬものゝなるならぬと云ふとや世評などはどうでもよい、唯その何れの心に人を想ひて世を念ぶ真質味が多量にあるかにその最後批評の標點がある。

居ると誰ぞや言ひたる海は風
日盛りの汗を拂ふや海の風
甲板に上るや汗を拂ふべく
湯殿より鷗の飛ぶを數へけり
晝寝さめてデツキに上る暑さ哉

風吹いて船の灯ゆらぐ星あかり
夢醒めて故山の月夜かくもがな
潮満ちて波間に昇る日の赤き
一輪のコスモスの花香ひよき
見せばやとれもふ葦の白う咲く
暖かき富途らばや故國まで
大海の潮に夏の日暮れぬ
潮勢はいよ／＼増しぬ日の盛り

港小景（その二）



卷之三

自分は某に使はれたことがあると、あり生かすと蘇へらせて、いふ言葉は謙遜でよく響くが、某も使つたことがあるぞといふ言葉を聞くといやな感じがする。

病人には薬を盛る可しだ。

相對性原理

松限健齋

(七)

澤尾旅館

七 祀 尾 澤

鍛治

前 貞 駅 ル ウ バ 館 旅 本 日

九 州 旅 館

親切 叮寧を旨と
營業致して居

ほして行つてしまつた。
日正午までにたしか十七八
とつたかしら、大分腰が痛さ
してゐたが耕地の機械場の正
笛が聞ゆるや否や待ち兼ねた
たよるに仕事をやめてしま

穀雜貨販仲販賣
桑田商店業搬運車動自
ラビヒンコイシヨショ
函郵一八
ギリヤクキヨルコニヤニ
新市街地民殖地

（アントニオ・バル
公園の廣場）
ス街の
カルトリオ、
セグンド、オフィシ士
「第二代書登記所」
▲・▲
へれ出で下さい。皆さん方へは
層勉強して安く易くして上ます。
タベリオン
アルマンド、アゼベード

し な あ
カフエー受負契約書、土地契約書
記書類をバウル一市で入用の時は
何時頃で、△皆さん△

エンシヤーダ物語

十一

卷一百一十五

